

平成 28 年度第 5 回仙台市協働まちづくり推進委員会 議事録

- 日 時：平成 29 年 2 月 8 日（水）18：30～20：30
- 場 所：仙台市役所本庁舎 2 階 第 1 委員会室
- 出席委員：風見正三委員長、大橋雄介副委員長、伊勢みゆき委員、小野みゆき委員、
佐々木秀之委員、島田福男委員、庄司真希委員、其田雅美委員、浜知美委員、
- 欠席委員：高橋早苗委員、本郷一司委員
- 事務局：市民局長、市民局次長兼協働まちづくり推進部長、市民協働推進課長、
広聴統計課長、地域政策課長、市民活動サポートセンターセンター長、
協働推進係長、他担当職員

○次第

1 開 会

2 報 告

- (1) 新たな助成制度の構築に向けたモデル事業の募集について

3 議 事

- (1) 仙台市市民活動サポートセンターの機能強化について
- (2) 協働の手引き・事例集について

4 その他

5 閉会

○会議内容

1 開 会

[事務局（協働推進係長）]

皆様、本日はお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。ただいまから平成 28 年度第 5 回仙台市協働まちづくり推進委員会を開催いたします。議事に入ります前に当委員会の定足数を確認させていただきます。本日は高橋委員、それから本郷委員から欠席のご連絡をいただいております。それから伊勢委員、佐々木委員、庄司委員につきましては遅れての到着となっております。

現時点で 6 名の委員の皆様にご出席いただいておりますので、この時点で既に定足数には達しているという状況でございますので、仙台市協働によるまちづくりの推進に関する条例施行規則第 4 条第 2 項の規定に基づきまして、会議は成立しておりますことをご報告申し上げます。

続きまして本日の資料の確認をさせていただきます。お手元には資料 1「新たな助成制度の構築に向けたモデル事業の募集について」、資料 1 の別紙「協働まちづくり推進助成事業募集要項」、資料 2「市民活動サポートセンター機能強化の方向性」、資料 2 の別紙「市民活動サポートセンター機能強化のイメージ」、資料 2 の参考資料「市民活動サポートセンター機能強化第 6 回アクションチームでの検討状況」、資料 3「協働の手引き・事例集の作成について」、資料の 3 の参考資料「協働の手引き・事例集 第 1 回アクションチームでの検討状況」、最後に追加の配布資料といたしまして、資料番号はございませんが、「平成 28 年度協働推進人材育成事業 NPO 留学してみませんか実施概要」、以上をお配りしております。資料の不足はございませんでしょうか。それではここからの議事の進行は風見委員長にお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

[風見委員長]

皆さん、こんばんは。サポセンのリニューアルの予算も固まってきて、いよいよ実施されるということになりました。

今の厳しい時代に、しっかりとクリエイティブな予算をつけてやっていくのは、それに関わる我々の責任もあるので、サポセンのリニューアルは、仙台市の市民協働のまちづくりにおいて、とても大きなエポックになると思います。そういう意味では、これから市民を巻き込んで、その地域や市民の人たちに愛される施設をつくっていかなくてはいけない。

それと同時に、手引きは、今までの手引きも大事にしながら、新しいメディアを多くの人に見ていただくような、マルチな意味を持った手引きもつくっていかなくてはいけないということで、節目というか、正念場になってきたかなと思います。

それでは議事に入りたいと思います。よろしくお願いいたします。まず議事録署名人は今回、島田委員にお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。それでは一応終了時刻は 8 時半ということで、目標にしたいと思います。遠慮なく議論していただいて、ま

とめていくようにしたいと思います。

2 報告

(1) 新たな助成制度の構築に向けたモデル事業の募集について

[風見委員長]

新たな助成制度の構築に向けたモデル事業の募集についてということで、報告を事務局からお願いいたします。

[事務局（市民協働推進課長）]

これまでも皆様からご意見を頂戴しておりました新たな助成制度でございますが、平成29年度の1年間、モデル事業として実施することとなりましたので、ご報告をさせていただきたいと思っております。

この事業を簡単にご説明いたしますと、市民活動団体や地域団体など、複数の団体が連携して取り組む社会的課題の解決ですとか、まちの魅力の創造といった取り組みを対象に、助成を行うものでございます。上限額は300万円となっておりまして、基本的に事業費の1割につきましては団体側の負担となります。その助成金と合わせまして、事業が円滑に進むように、市内の市民活動の支援組織等による伴走型のサポートもしていきたいと考えてございます。

そのサポートの具体的な内容をご説明いたしますと、事業の実施や検証などに関するコンサルティング、事業成果の向上、協働のノウハウの蓄積ですとか定着、事業の実施基盤の強化に向けたサポートを行っていくというところでございます。

具体的なサポートの例としましては、事業の進め方や協働のプロセス、合意形成に関する助言、また広報関係の専門家の派遣や、先進事例、団体、制度の紹介といったものを挙げております。もちろん足りない部分があるかと思っておりますので、そのほかの専門家も交えて、オーダーメイドでご提供していきたいと考えてございます。

3月3日まで申請を受け付けてございますが、現在10件程度の問い合わせ等々が来ており、具体の相談もあります。例えば大学と地域団体による若者と住民の交流ですとか、復興まちづくりの関係、貧困対策といった幅広い分野での応募が見込めそうな状況にはなっております。スケジュール的には3月中旬にプレゼンテーションによる審査等も行った後に、3件ほど決定したいと考えてございます。

来年度1年間モデル事業として実施して、本格的な助成制度としては、30年度以降やっていきたいと思っております。そういった本格的な制度の構築に向けた検討もしてまいりたいと思っております。この委員会にもご報告しながら進めてまいりたいと考えてございますが、委員の皆様もぜひこの事業への応募について、関係の皆様にもPRをしていただければと思っております。

[風見委員長]

ご説明のとおりですが、何かこれについて質問などありますか。これは委員が関係する団体が応募してもいいのですか。

[事務局（市民協働推進課長）]

可能です。

[風見委員長]

助成金額は上限 300 万円ですから、それなりのことができますと思います。ぜひ有効に使っていただきたいので、いっぱいチャレンジしていただけるよう、思いつくところにはぜひ声がけいただきたいと思います。助成率が 10 分の 9 なので、そのあたりはちゃんと頭金があってということですね。これについては何かありますか。

[小野委員]

申請書等を郵送ではなくて、直接持参に限るってということが何カ所か書かれていたようですけれども、何か特別にそこで話を聞くというような狙いがあったのかなんでしょうか。

[事務局（市民協働推進課長）]

複数団体の連携が必要というような、さまざまな条件ありますので、そういった制度の中味を趣旨なども含めてご説明しつつ、申請書の書き方などもサポートをしていきたいということもあり、直接面談をさせていただいて、お話を聞きながらやっていきたいという趣旨で、必ず来ていただくというような立てつけにしているところでございます。

[風見委員長]

ほかには何かありますか、島田委員、どうぞ。

[島田委員]

このモデル事業は、私もすごく期待しています。今問い合わせが約 10 件程度ということですが、結構いろいろな団体が来ると思います。申請の前の事前相談をしっかりとやっていただかないと、あとが厳しくなると思いますので、ぜひそのところをしっかりとお願いしたいと思います。

[風見委員長]

そのとおりですね。先日もある基金関係の審査委員会があって、事務局がある程度ベースとなるバックボーンの調査や、手を入れながら伸ばしていくというのも必要だと思いま

した。

そういう意味で、条件つきで審査を通すときもありますし、事務局は特に額も大きいので、その後もしっかりとフォローしていくということを前提に、コンサルティング的なものをしていくということが重要かなと思います。このあたりに詳しい佐々木委員、庄司委員、大橋委員など特に気になる点はないですか。

[佐々木委員]

やはりこういうものをモデル事業と明記していますので、窓口のところで、ただ単にお金を渡すという銀行のようなものではなくて、きちんとどういうモデルが描けるかという青写真みたいなところも確認していただくと、非常に審査するときに役に立つと思います。

[庄司委員]

サポートチームの関わりですが、このサポートチームの6団体が、1つのモデル事業に全部で関わるのか、それともこの団体にはこのサポートチームというメンターみたいな形で関わるのかということと、こうやったほうがいい、ああやったほうがいいという意見に事業に取り組む人たちが、かえって混乱して、事業がうまくいかないということがないかと思っています。

[大橋副委員長]

細かい質問ですが、審査員はどのような方々がやるのかというところをぜひお聞かせいただければと思っています。

[風見委員長]

事務局からその点を説明願います。

[事務局（市民協働推進課長）]

審査員につきましては学識経験者の方など、さまざまな分野でご活躍されている方たちを想定してございます。

先ほど庄司委員からお話がありました、どうサポートするのかといったところですが、かなり幅広い6団体になりますので、ひとつは全体のチームとしてサポートする部分として、例えば何カ月かに一度ケース会議を開くというものもありますし、いわゆる伴走型のいつでも相談できる主担当的な団体を案件ごとに選び、団体が求めているものとのマッチングをさせていくという、両輪で回していければと思っています。

[大橋副委員長]

今のサポートチームについて追加の質問です。サポートチームとして、主に在仙のNPO

などが書かれておりますが、これはどういった方々が具体的にサポートするかというところまで決まっていらっしゃるんですか。例えば代表がやるのか、法人の中でチームをつくるのかなどいろいろな形があると思います。

[事務局（市民協働推進課長）]

基本的には団体として受けていただくという中で、我々が期待しているところとしては、代表クラスの方に入っていただくことを考えてございます。

[風見委員長]

ひとつは審査から事業者の決定、それ以降のハンズオンのコンサルティングを透明性を持ってやるということが何より重要だと思います。

評価基準がしっかり明記されていて、それに基づいて選定されたということと、サポートチームについては、どういうところが強みで、こういうサポートチームになっていて、どの部分を助言していただけるのかということが申請するときのひとつの動機にもなるし、こういう事業や制度をつくるときのアカウンタビリティだと思います。

それについてどういう責任を持っていくのかという意味では、どういう団体を育てていて、どういうゴールがあるのかというのをしっかり持っていないと、出っぱなしだと言われてしまいます。

やはり額が大きいだけに、こういうサービスができて、A地点からB地点まで持って行けるんだという主張があるべきだと思うので、それをしっかり透明に皆さんに公開した上で参加していただくということでしょうか。

[庄司委員]

ひとつ確認ですが、プレゼンテーションと中間報告は一般公開される予定はあるのでしょうか。

[事務局（市民協働推進課長）]

基本的には公開で行いたいと思っております。

[庄司委員]

協働団体の活動が一般の市民の人に広がりますし、いろいろな事業をされていても、誰がやっているかというのはあまりわからないと思うので、公開されるといいと思います。

[事務局（市民協働推進課長）]

特に中間報告会などはいろいろな方々にも来ていただいて、そこでネットワークのようなものが生まれてくることも期待したいと思っておりました。

[風見委員長]

マッチングして、しっかり受けたからには報告の機会があって、気合を入れてもらわなくてはならないというもありますし、プレゼンの機会があったり、メンターがいたり、その中でも横の連携ができたり、発表することによって、次に応募したい人が見に来て、その事業の趣旨がはっきりわかって、よりの確な人が応募してくれるということはいいと思います。

数が増えればいいわけではなくて、この目的にふさわしい人が増えてくれなければ意味がないので、そういうところを、ちゃんとシビアにやっていていただきたいなと思います。とても重要な制度で、アグレッシブにつくっていったということだと思いますので、結果をしっかりと出せるように、気合を入れて頑張っていきましょう。

大体議論いただきましたことを事務局は踏まえて、委員会にもぜひフィードバックしながら、しっかり進めていただきたいと思います。

3 議事

(1) 仙台市市民活動サポートセンターの機能強化について

[風見委員長]

次に議事に入りたいと思います。1番目の議事がサポセンの機能強化についてということで、最初に其田委員からよろしくお願いします。

[其田委員]

それでは私のほうから資料2の参考資料を基に、現在のアクションチームでの検討状況報告をさせていただきます。直近で1月19日に第6回のアクションチームを開催いたしました。それまでの本委員会での議論、アクションチームでの5回までの議論、そして公開型の「サポセンこうなったらいいっちゃね」会議での市民の皆様のいろいろなご意見を少し振り返ることから会は始まりました。

主に話し合われたことは4つでございます。1つ目がコンセプトについてということ。2つ目がコンシェルジュ・人材育成について、3つ目が企業との関わりについて、4つ目が1階の機能・役割について、以上の4つについて話し合われました。

市民活動サポートセンターの機能強化で、特徴的なもので言うと、いわゆるコンシェルジュをセッティングするという話がありました。その中では、外部から新しい人材を引っ張ってくるよりは、今働いているサポセンスタッフメンバーの中で、その役割を果たすべきではないか、そのような人材を育てるにはどういうふうに進めていかなければならないのか、そういった議論が行われました。

企業との関わり方については、企業に勤めていらっしゃる方のまちづくり活動への関わり方を明確にしていきながら、どのようにサポセンを利用してもらうかをテーマに議論をさせていただきました。

1 階の機能の強化、役割についてというところは、1 階に残しておくべき機能というの、現存であるのではないからスタートいたしました。受付の機能というものは残しておく必要があるし、さまざまな市民協働を促すような仕掛けをしていくスペースでありたいといった議論がなされました。

今後につきましては、アクションチーム第 6 回までの会を踏まえて、公開型で市民の皆さんを巻き込んで、今までの計画をご紹介するようなイベントを、検討していきたいということがまとめられたと思います。他の委員の方も参加されていますので、補足がありましたらぜひよろしくお願いたします。以上です。

[風見委員長]

はい、ありがとうございます。これだけ検討が進んできましたので、いよいよこれから実際に機能、デザイン、そういう段階に入ることになると思います。

[事務局（市民協働推進課長）]

それでは資料 2 でございますけれども、こちらをご説明する前に、前回 12 月に開催しました委員会の後に、機能強化の方向性や具体策に関して、数名の委員の皆様から追加でご意見の提出がございましたので、口頭で恐縮ですが、概略をまとめて少しお話しさせていただきます。

いろいろご意見をいただきまして、ひとつは目指すべき市民協働やサポセンの姿がやや不透明であるとか、単に集客をすればよいというものではないというお話、市民活動を行っている人、市民活動を行おうとしている人、そういった人を応援して、裾野を広げていくことが大切であろうというご意見がありました。

また市民活動団体にも、いろいろ発展段階があると思いますが、その発展段階を考えたときに、どの段階の団体をサポセンのターゲットとするのか、そういったことで機能も変わるであろうといったことですか、協働条例にサポセンの役割を掲げていますが、その中でも人材育成とか相談機能といういったあたりが弱いのではないかというお話がありました。

その辺をアップさせていくためにはどうするかということで、やはりサポセンスタッフの人材育成が大切であろうというようなことや、市民活動や NPO に関する専門的な知識はもちろんです、利用者との密なコミュニケーションを図っていく必要があるのではないかと、それがなくなかなか団体の成長にはつながっていかないというようなことです。

あとは、サポセンを通じて市との協働の機会や情報が得られるとよいというご意見や窓口の協働のコーディネーター、つなぎ役をしっかりと明示すべきだというお話がありました。

あとはハード面になりますが、デジタルボードを入り口の外に設置して、館内への誘客を図るといいのではないかとのお話ですか、入り口付近が暗い印象がある、何をするとところかわかりやすくしつつも、わくわくするような内装にイメージチェンジを図ったら

どうかというお話がありました。

それと企業関係者も立ち寄りやすくするような工夫が必要ですか、企業サイドのニーズの把握や、企業のいろいろなまちづくりの取り組みの情報発信の強化も必要であろうといったようなご意見をいただいております。

そういった点やこれまでの委員会、アクションチームのご議論を踏まえまして、いったん総括として機能強化の方向性の全体像をまとめましたのが、この資料2でございます。

協働条例ではサポセンを市民活動の促進の拠点に加えて、多様な主体の協働の推進の拠点にするという位置づけの下に、本市の協働のまちづくりの目指すべき姿として、多様な主体が自立して連携して、創発、イノベーションが生まれるといったような都市像を掲げておりまして、この辺りが目指すべきところと考えてございます。

サポセンの現状は、いろいろ見方はあろうかと思いますが、市民活動促進拠点としては大きな役割を果たしてきたというところでございます。異なる主体間の交流はあまり見られないといったことですか、若者の増加、利用者の増加はしているものの、まだ裾野の広がりには弱いといったような状況でございます。

そこで機能強化のコンセプトを「多様なまちづくりの担い手が集い、アイデアを交え、つながりを育む場づくり」ということで、市民の皆さんが気軽に集まって、社会や地域の課題の解決ですか、まちの魅力の創造に向けて取り組んでいくための機能の充実を図ってまいりたいと考えてございます。

そして具体案ですが、ハードとソフトに分けて記載してございますが、関連しておりますので、合わせてご説明いたしますと、まず交流スペース、オープンスペース、こういったものの増設を図りまして、温かみのある集いの空間づくりを考えております。

具体的には1階のエントランスなどを中心として改装し、そこを活用したソフト事業としましては、昨年の11月に実施したマチノワ WEEK での利用の仕方を想像していただければと思います。さまざまなオープンイベントや団体の活動発表の場、ワークショップ、交流会といったものへフレキシブルに活用していきたいと考えてございます。

また、カフェやチャレンジショップについての議論も、これまでアクションチーム等々でも話されておりますが、そういったものにつきましては、サポセンの企画イベントの実施時に開設するといった形で、試行的に設置してみたいと考えてございます。

なお、現在の5階の交流スペースについては、1階の交流スペースと差別化を図るといったようなところもあって、ある程度落ち着いて、打ち合わせをしたい方のために、簡単なパーティションのようなもので、各テーブルを少し区切ることも考えてございました。

また1階の窓口に総合案内を設置し、熟達した職員を配置しまして、施設の利用案内や協働のコーディネートなどを行っていきたく思っております。サポセンの認知度、視認性の向上に向けて外看板の設置や、それぞれの交流スペース、もしくはサポセン全体の愛称をつけることによって、サポセンが変わったというようなアピールをすることも考えられると思います。

さらには情報発信・提供機能の強化としましては、プロジェクターやデジタル機器を設置し、これは現在は館内を想定しておりますが、館外へのアピールとしても、外看板とも一緒に考えていきたいと思っております。それらによる館内イベントの情報やさまざまな市民活動や協働の事例の発信、いずれはオープンデータなども活用して、地域課題への気づきや仙台の魅力再発見のようなコンテンツも充実させていければと考えてございます。

ソフト面になりますが、積極的な情報の収集・発信による利用者層の拡大ということで、ここは企業の社会貢献活動なども含めまして、どんどんその情報を蓄積させていきつつやっていきたいと思っております。そのためにも企業や大学にも一層アウトリーチをかけていく取り組みをしてまいりたいと思っております。

そしてこういった機能強化を支えるスタッフの育成というところが重要な点で、今、指定管理者とも相談しながら進めているところでして、一番大切なのは相談対応力の強化というところかと思っております。具体的に申し上げますと、例えばベテランスタッフと若手のコンビで相談対応をすることによって、OJTでノウハウの移転をすることや、いろいろな外の企画等に積極的にスタッフが参加していくということを考えております。

また、これは既に取り組んでいる部分ですが、サポセンが中心となって市内のさまざまな市民活動支援機関、公的な機関等と情報交換会といったものを通じた関係者、関係機関とのネットワークづくりを進める中で、幅広い情報のストックを図りつつ、また内外の研修制度も活用しながら、相談者の話を引き出す力や情報を整理する力、ホスピタリティ、寄り添う力を養ってまいりたいと考えてございます。

そういった機能強化策も含みつつ、29年度の事業方針を立ててございまして、「ささえる」「ひらく」「つながる」というキーワードで分けて、事業計画を立ててございます。

具体的に説明しますと、「ささえる」につきましては、まさに市民活動支援の基本機能のところでした、場の提供から相談対応、担い手育成、情報収集・発信といったところでございます。今年度から数団体につきましては、組織基盤強化のための伴走型の支援も行ってございます。新年度は実践レベルでのサポートをしていくほか、地元企業や大学へのヒアリングなども行ってまいりたいと考えています。

そして「ひらく」につきましては、新たにリニューアルした1階のエントランスでのさまざまな団体によるトークイベント、ワークショップや交流会、参加型のイベントの開催を通じて利用者の裾野の拡大を図っていくほか、先ほど申し上げた愛称の募集などによる新たな施設イメージの定着を図ってまいりたいと考えています。その愛称の募集については、少し内装空間を変えて、一定程度ご利用いただいてからになると思っております。

また「つながる」につきましては、これはマチノワ WEEK が大変好評でしたので、こういった企画を複数回実施するなどして、多様な主体がつながる場を設けていきたいと思っております。

マチノワ WEEK は企業の関わりが弱かったところがありまして、企業も関わりが持てるような内容にしていきたいと考えております。そして区役所やエル・パーク、アシスタや

社会福祉協議会といった関係機関とサポセンのつながりも強化してまいりたいと考えております。資料 2 の別紙のイメージパースは本当に多くの皆様関わってつくられたものでございまして、貴重な成果品だろうと考えてございます。

このサポセンの機能強化につきましては、本委員会やアクションチームにおいて、さまざまな意見をいただくとともに、利用者のアンケートやワークショップ、そういったものの開催を通じて、市民の皆さんの声を反映させてきたものであると考えてございます。

先ほど、其田委員からお話ございましたように、新年度もこういった機能強化に関する情報を積極的に発信していきまして、より多くの市民の皆さんの機運をさらに高めていって、空間整備を行っていくとともに、引き続き委員会の皆様には、プロデュースもしていただければと考えてございます。説明は以上です。

[風見委員長]

ありがとうございました。このサポセンの機能強化については先ほど其田委員からあったように、「corabo forest」とか「市民活動の森」というのはとてもいいと思いますし、コンシェルジュをつくっていくというのも、これまで出てきたことかなと思います。

あと大阪ボランティア協会の「企業市民活動推進センター」のように、市民活動だけではなく、協働まちづくりということにおいては、本当に対等につくられていくというような意味で、特に企業との連携というのも大きいと思います。そういう意味では市民が集まっているということと同時に、やはりいろいろな企業の方もいらっしゃるような場にするために、少し考える必要があるのかと思いました。

それと何かしら仕掛けていくと書いてありますけれど、仕掛けていく場所や情報発信ということでしょう。これを機に、こういうポジティブなメッセージが出ていけばということで、具体的に資料 2 をもう一度俯瞰的に見ると、ひとつは条例での位置づけと横にありますけど、この下に自立・連携・創発とあります。前に皆さんと一緒につくってきた、まさにこの言葉を据えて、具体的に指針だったり、手引きだったりを進めてきましたが、それを具体的に加速するサポセンの改造のために、この自立・連携・創発という言葉にまた戻らなくてはいけないんだなと思って今見ていました。

そういう意味でいよいよ形になるものをつくるということですので、デザインにはこれからしっかり市民の方も入れながら、やっていかななくてはいけないと思います。パースがありますが、サポセンは、より木を入れたり、緑を入れたり、また交流スペースというのがちゃんとできるようなしつらえにしていくというのがイメージですので、このパースもあくまでイメージとして、みんなでつくっていくということだと思います。

いろいろな視点があると思いますので、特に検討に関わっていただいた委員の皆さん含めて、少し議論したいと思います。よろしくお願いします。

[佐々木委員]

アクションチームもかなり何回も議論を重ねて、もう補足することは何もないのですが、やはり何かやるとなると、いややっぱりここはこのままのほうがいいのか、どうしてもそういう意見が出てしまうので、これをどこまで思い切れるかということと、もうひとつは、市民がこの施設に気づくかどうかとか、対市民が本当に使いたくなるかという意味で、ここでやはりきちんと決めて、思い切ったことをやれるかどうかという何か最後の決断のところをサポートセンターのスタッフも一丸となってやれる体制をどう構築するかということだけがアクションチームの最後の課題として残ったのかなと思います。

[風見委員長]

これについては具体的にこれから動き出すので、一言ずつでも感想や思いを言っていたほうがいいのかと思います。

[其田委員]

例えばロッカーの貸し出しを増やすというような基本機能の充実や利用性の向上ということで申し上げます。これからもう少し深掘りをしていかななくてはいけない部分として、貸し出しサービス・機能について、少し業務フローで洗い出しをさせていただいたほうがよろしいかなと思ったことが最近ありました。サポセンで、私もロッカーを利用させていただいているのですが、年度末に平成 28 年度の事業報告書を出すようにという通知が来ました。ロッカーの使用頻度を書くなら分かりますが、その団体の事業の報告書を書かなくてはいけないもので、「ロッカー」つ借りるのに事業報告書を書かなくてはいけないんだ」と初めて分かって、少し驚きました。

もう一つ、いろいろな団体のチラシを配架していただく制度を積極的に活用していますが、どうしても教育機関はNGというところもありまして、企業を巻き込むのであれば、もう少しチラシの運用ルールを改善していただければというところがありました。そういった今までのベースとなるサービスについての利便性を向上していくことも考えていく必要があるのではないのでしょうか。

[風見委員長]

そのあたり大事ですね。コンシェルジュというくらいですから、ホスピタリティとか、お客様に対して何を提供していくのかというベーシックな見直しはやはり常に重要です。菊地センター長、いかがですか。

[事務局（仙台市民活動サポートセンターセンター長）]

今、其田委員からお話いただいた 2 件ですが、ロッカー、レターケースなど、その活動者の方の荷物が保存できる設備に関しては、ご利用いただいたあと、半年に 1 回、事業

報告書ということで、その半期の活動内容や課題などをご提出いただくということはございます。

なぜ行っているかと言いますと、サポートセンターをご利用されている団体の情報公開ということで、いただいた資料をファイリングして 1 階に置いて、そういったことで市民活動にどういったものがあるかという情報公開を行っているということが 1 つございます。

もう 1 つ、チラシの配架の件ですが、今其田委員がおっしゃったサービスは、恐らく骨プロというチラシ配架サービスかと思えます。サポートセンターだけのチラシ配架サービスであれば、例えば市民活動であれば、また、有意義な情報であれば、企業の情報や教育機関の情報も配架しております。

もう 1 つ骨プロという仕組みは、仙台市内の公共施設の 11 の施設が連携して、情報の背骨を通すプロジェクトということでやっているものです。これにつきましては、サポートセンターでチラシを大体 220 部ぐらい受け付けて、サポートセンターのスタッフが市役所の文書箱を使って、11 の施設に一気に配架できるという仕組みです。

これにつきましては市民活動団体主催で、日時が明記されているイベントチラシに限定させていただいておりますので、恐らくご利用できませんというような対応になったかと思えます。

これにつきましては、当センターだけで話が進められるものではなく、11 の施設が連携して、このチラシが何でこの場所に置いてあるのかというところの認識統一が必要といったこともございますので、現段階では市民活動団体のイベントチラシに限定させていただいているという状況でございます。以上です。

[風見委員長]

いろいろ使い勝手の理解を進めなくてはいけないというところもあって、その部分は改善していただいて、前回のマチノワ WEEK のように、今までのセンターの中の内なる改革の声というものをつなげていくのがとても重要だと思います。そういう観点で菊地センター長、何かご意見ありますか。

[事務局（仙台市民活動サポートセンターセンター長）]

この機能強化の話は内部でも話をしておりまして、やはり実感としてあるのは、11 月に行ったマチノワ WEEK で、本当に多くの方にお越しいただいて、結果的に 57 の関連機関とゲストの方にご出演いただいたり、関わっていただいたということはございます。

ただ、4 日間という日にちであったからできたことでもあるので、それをどう日常化していくかというところでは、やはり考えなくてはいけないかなと思います。

スタッフの中でも、あの 4 日間をどのように年間であまくりばめながら日常化していくかというところの意識はもちろんございますので、この機能強化というののももちろん外側が変わるというだけではなくて、その中のしつらえもしっかり変わっていくというところ

ろとつながればよいというふうに、中でも調整をしている最中でございます。

もうひとつ、こちらで考えなくてはいけないところとしては、具体的なオペレーションの部分として、リスク管理のことですか、そういったところについては、もう少し精査をしなくてはいけないというところがございます。

そういったリスク管理の部分も含めて、今後恐らく設計なども入っていろいろ議論されるかと思しますので、この方向性で出ている部分とオペレーションという現実の部分と、また動線だとかそういった調整みたいなものをプロの方と合わせて一緒にやって、より具体的な案にしていくということが必要なのかなと考えておりました。以上です。

〔風見委員長〕

ありがとうございます。マチノワ WEEK のようなとっかかりになったものを、イベントだけに終わらせずに、中の自己改革が一番重要だと思います。ファッションでもそうですが、形から入るのも重要なので、それを変えることによって気分も変わっていくと思うので、これをいい機会にさせていただければと思います。

〔浜委員〕

このハード面で、カフェは常設ではなくて、時々やっていくという形ですが、チャレンジショップは結構いろいろなところでやっていて、仙台市でもチャレンジショップがあるので、実際やってみないとわからないと思いますが、これで果たしてお客さんが増えていくのかというのは心配です。

できれば、後には常設するような形でいけるのがいいのかなどと思いつつ、聞いていました。やはり常に数字と向き合ってやっていかないと、施設も充実しないと思うので、次の 1 年間は、いかに人に来てもらうかということに重点を置いてやっていくというような形でいくが一番いいのではないかなと思って聞いていました。

〔風見委員長〕

ありがとうございます。それは何か事務局からありますか。

〔事務局（市民協働推進課長）〕

チャレンジショップはガスサロンの中ですとかいろいろありますが、ここでやるショップは社会課題の解決とか市民活動ならではの背景を持ったチャレンジショップを想定しております。

例えばカフェの話で言いますと、周りに喫茶店もあり、なかなか競争も激しいというようなこともありますし、常設で、経営面で成り立つかどうかというあたりも、未知数なところもありますので、まずは試行的に何かサポセンの企画やイベントをやったときに、やってみるといったような形でスタートさせてみて、状況を見ながら常設というのも今後考え

られるかと思えます。

[風見委員長]

ありがとうございます。島田委員、いかがですか。

[島田委員]

私たちはどちらかと言うと、コミュニティセンターや市民センターを利用する機会が多いのですが、市民センターですと、どちらかと言うと利用する側が中心になって、市民センターの職員とコラボするというのはあまりないです。市民センターのほうから企画が持ち込まれるとやりますが。

このサポセンの強みはやはりコーディネートするということで、そのスタッフを配置してもらえれば、また違った地域での活動ができるのかなと、いろいろなまちづくりが考えられるのかなと思っております。

[風見委員長]

ありがとうございます。小野委員、いかがですか。

[小野委員]

企業の関わり方ということについて、いろいろ課題に上がってきているのは、よくわかりました。そのご意見やご議論の中で、企業のかかわり方というのは、やはり「社会貢献活動」なのか？というのが、私自身常々疑問に思っていることです。私どもの企業グループでも、いつときのような社会貢献活動に対する盛り上がりはみられなくなっており、社会貢献活動にどんどん投資をしていこう！という流れではなくなっている気がします。むしろ企業としては、ある程度ビジネスとして成立することを前提に、自社の強みである製品・ソリューション・サービスなどを活用して、その地域や社会の課題を解決していきましょう！という方向に大分シフトしていると思います。そんな中で「社会貢献活動」という言葉の持つイメージが、ごみ拾いなどのボランティア活動や募金活動や寄附のようなことに限定して捉えてしまう企業がいるとしたら、すごくもったいないという気がしました。企業が社会への貢献として果たす役割と、その見返りとしてきちんとビジネスとして成立すること。それらをどの辺りでバランスを取っていくべきかについて、相談に乗っていただけたり、アドバイスをいただけたら、また企業の新しいパートナー探しなどをどの辺までやっていただけるのかということにつきましても、ご議論いただけたらありがたいと思いました。

[風見委員長]

ありがとうございます。それは重要なポイントですね。私も大学や一般社団法人など、

いろいろな立場で施設を借りようとする、目的等で借りられる幅や料金が違います。それは企業に対して閉じているのか、開いているのかということも含めて、そういう規定などに最終的になると思います。

そういう意味で、今のサポセンは産官学民とか、公民連携でやるという意味で、企業の人から見たときの使われ方というのは、どのように映っていると自覚されているのでしょうか。

[事務局（仙台市民活動サポートセンターセンター長）]

基本的には営利目的でなく、公益的な活動でというのがベースにはなっておりますので企業の場合も、基本的には自社の利益に直接つながる本来事業の場合は、施設の貸室といったものについてはご遠慮いただいているというのが実際のところでございます。ただ、ソフトの面で相談や事業に関してはもちろん対応はさせていただいている状況でございます。

[風見委員長]

その部分は少し制度設計を考えたほうがいいのかもかもしれませんね。協働まちづくりの段階になって、そういう条例になったわけですから、そう考えると、協働まちづくりセンターのようなものにサポセンがなっていくとき、もともとの市民活動サポートセンターという名前自身では包含できないものが出てきて、その機能があってもいいと思います。

それが付加されていくということでもいいし、建築で言えば合築されることもあって、いわば合築されることによっていいこともあるわけです。多賀城市の図書館にも大手書籍・レンタル店が入ってきたり、商業施設といろいろなシビックセンターが複合施設になる時代ですし、やはりサポセンというものの機能が、何か複合していくべきなのかとか、指定管理としてのせんだい・みやぎ NPO センターだけではなくて、もしかしたらそういうことを分割して、協働マネジメントする必要もあるかもしれません。

そういう意味でその辺を事務局はどう考えていますか。今回のサポセン自身の改造ということではなく、市民活動サポートセンター全体の機能論をどこまで議論するかということとは、結構あると思います。小林次長、どうですか。

[事務局（市民局次長兼協働まちづくり推進部長）]

実は、この企業の方々の社会貢献というのは、一番最初にサポセンができたときから、メニューの1つとしてはあって、なかなか正面から取り組んでこれなかった長年の課題ではありました。

今回はそういう意味で、アクションチームのほうからもそのような課題について、さまざまご意見をいただいたということは非常にありがたかったと思っております。

どこで線を区切るのかというのは今の小野委員からお話があったように、もう少し時間

をかけて詰めていって、具体的にそういった社会貢献活動に関わられている企業の皆さんからも、もう少し話を聞きながらやっていくことなのかなと、今の段階では思っているところです。

[風見委員長]

全くそのとおりで、市民も含めてサポセンに対する活動や機能について、サポセン内部や委員会の意見もそうですし、市民全体の意見を収集しながら、やはり新しい機能はどうかあるべきかということを決めていってもらおうということではないでしょうか。

そういう意味では市民活動というところから、協働まちづくりになったということはとても重要なことで、そこから全体も変わっていくということが重要なので、それは段階的でいいと思います。そういう意味でこれからやる手引きも含めて、そのあり方を見ていくということではないかと思います。

やはり協働まちづくりに名前を変えたということは、とても重いと思います。そこに一歩踏み出したというのは、ある意味、市民局というものを超えることでもあるかもしれません。

ただ、制度設計は、簡単に変えるとまた齟齬が発生するので、しっかりと詰めていけばいいと思います。とてもいいご意見をいただいたと思います。ありがとうございました。

[伊勢委員]

まず協働まちづくりというところではやはり協働というのは目的ではなく手段だと思っております。今後の仙台市をどういうふうにしていくかといったところで、その目指す仙台市に向かっていく手段の1つが協働だと私は捉えております。

そういう視点で発言をさせていただくと、サポセンが今後どうあればいいかというときに、資料2の現状というところにあるように、市民活動促進のための拠点という設立当初の目的というところでは、確かに大きな役割を果たしているかと思います。

その市民活動団体の異なる主体間の交流はあまり見られないといったところがあって、利用者の裾野の広がりという視点と、あと今後の異分野での協働というところがポイントになるのかとは思っております。

機能強化の具体案というところで、実際に交流スペースの活用と利用促進というところで、団体による情報発信の場とか機会の提供というのがありますが、私もマチノワ WEEK のような取り組みというのは大変素晴らしいと、個人的には感じておりまして、やはりそれをイベント的ではなくて、日常的になったらいいというのが思いとしてはあります。

どうしても貸室を利用するとなると、自分たちの団体がやりたいときに予約をするというのが現状だと思います。ほかの自治体の事例で皆さんもご存じだと思いますけれども、一案で、例えばこの第何曜日は一日ここに行けば、何かの団体が何かをしているみたいな、

定期的にその部屋を無償とか格安で、どこの団体でも使っていいとするような、私もすごいコアな利用者ですけれども、やはり自分たちの活動だけで終わっています。利用はしているけれども、やはり交流がないというのは実際のところだと思っています。実際に、ほかの団体の何かに参加するかと言うと、いろいろイベントの案内はあったとしても、なかなかハードルが高くて、気軽に行くという感じにはいかないと思います。

日程が調整されて、時間があって、興味関心があればそこに行くみたいなのところがあるので、市民活動の交流拠点だったり、裾野を広げたりするような場をつくらうと思えば、貸室の稼働率にも関わるとは思いますが、空き室になっている時間帯にどこかの団体が何かして、気軽にどうぞみたいな感じで入れる機会があったらいいのかなと思います。

そしてその貸室使用料を例えば無償にして、団体の手挙げ方式とか、ここの団体とここの団体が組んだら何か面白い企画ができるんじゃないかみたいな形で、サポセンのスタッフが場をつくってコーディネートしたりとかという場があってもいいのかなと思っています。

とにかく知る場面がないとコラボレーションというか、協働も生まれないのかなと思うので、いろいろな工夫とかアイデアがたくさんあるのですが、私だったらもう少し、今日時間が空いたからさらっと行ってみよう、どこの団体がやっているんだろうみたいな感じでできたらいいのかなと思いました。

[風見委員長]

ありがとうございます。すごく大事な意見ですね。特に小さい事業者の場合には、なかなか出会いが無くて、昔、異業種交流会はありましたが、あれは結構盛り上がりも意外と実はないんです。ある程度目的を持っている人が集まらないといけないので、そういう意味でそういう場所は意外とないんです。

そういうところに期待して入られた方もいると思うので、そのあたりの強化の意向があったということを、ちょっと頭に入れていただきたいと思います。庄司委員どうでしょう。

[庄司委員]

私は自分がサポセンのスタッフだったらという目線で考えてしまうので、ここまできたらまずはやらなくてはいけないという覚悟を決めているのは、サポセンのスタッフの皆さんだと思います。今ある1階の機能を、上のほうに持って行ったときに、使い慣れた人たちのかなりのクレームが一時期は結構来るだろうなということと、それにサポセンのスタッフの方々が対応していかななくてはいけないということ。窓口対応のスタッフの方も、多分新人の方が多いと思うので、その中で中間支援組織のスタッフとして専門性も求められるというあたりで、かなりの重圧があるのではないかと思います。その中でスタッフの人たちの心が折れないように、仙台市の方も人材育成や、もし今と同じ指定管理料の中でやるならば、どこまで求めるのかということも考えていただけるといいのかなと思います。

あとはバリアフリーの件で、やはり上の階まで行って会議室の予約をしなくてはいけないとなったときに、若干狭いエレベーターですので、車椅子の方とか大変だったりするのではないかなということも検討しつつ、それを越える素敵なスペースにしなくてはいけないというところで、かなりなプレッシャーではないかなと思いながら聞いておりました。

それと企業の関わりというところで、小野委員からもお話がありましたとおり、企業も今、実際の経済活動も大変だと思うので、その中で NPO や行政が、その企業に社会貢献活動を一方的に求める形だと、やっぱりいけないのかなと思います。

仙台市と多様な主体の団体と、企業がどういうふうに組んでいったらよりよいパートナーシップができるのかというあたりは、もう少し企業側のご意見をお聞きする機会が必要なのではないかと思っておりました。

[風見委員長]

ありがとうございます。これはまだイメージで、ハードとソフトとこの絵が全部一致しているわけではないとは思いますが、動線について気をつけながらやらなくてはいけないというのはあると思います。これについて何か議論はありましたか。

[事務局（市民協働推進課長）]

具体の動線等については、指定管理者とも協議しておりますが、今お話のあった車椅子の方の対応等も勘案し、受け付けは引き続き1階であることを考えておまして、また、人材育成の部分につきましては、今20数名ほどスタッフがおりますので、その体制の見直しや人材育成のいろいろなプログラムの展開によって、育成を図っていくということで、指定管理者と詰めているところでございます。

[風見委員長]

そのあたりはデザインの問題でもあるし、機能論でもあるので、まさにこれからしっかりデザインしてくれる人も選定しながらいくということになると思いますので、落とさないようにしておきたいと思います。

[佐々木委員]

動線の部分のところで、補足しておきたいと思ったのは、例えば今の2階の事務室を上階に上げるという議論のときも、やはり障害者が2階に上がれないのではないかなという議論がありました。

ただそれも振り返ってみると、例えば今の2階の事務所に障害者が上がれないとなると、そもそもこの施設で、障害者を雇用することもできないとなるわけです。

そういった意味では、確かに今、現状でスタッフが見るにあたって、これはここで残すという視点ももちろんありますけども、そういうものを切り替えていく場合に、そのほか

の視点から考えて、代案などを考えていくということもしていかなないと、一步間違うと、今のままというふうになってしまう恐れもありますので、その辺にもう少し外部の視点もきちんと入れた中で、これまでアクションチームで練ってきたものを、ここからのステップではさらに内部の働いている人と、こういう委員会と、さらに外部の者を入れて、アイデアを出して深めていくということは課題として残っていたということ、補足したいと思います。

[風見委員長]

そうですね、僕も建築のデザインをやるのでわかるんですけど、大体はデザイン力ですね。いいデザイナーをやれば、デザインで大体解決します。それとやっぱり構造や設備が古いということになると、どこまでやるかというのはあるんですけど、今、佐々木委員がおっしゃったとおり、障害者の雇用のことを考えると、あのビルは大丈夫なんでしょうか。

[事務局（市民協働推進課長）]

今2階にある事務室は、例えば3階など上の階に持っていけば、エレベーターで上がることは可能ですので、車椅子を使用する方の雇用ということでのバリアフリーは大丈夫だと思います。

[風見委員長]

あのエレベーターは狭いんですよ。構造はそう簡単には変えられないので、今回やるという意味ではなくて、そういうことも含めて、長期的に点検するいい機会になればいいと思います。ただやはり機能革新というのはデザインです。今働いている方、外の方、デザイナー、企業のいろいろなプログラマー、事業計画をする人がそういうことを議論して、公開プロセスでいかに、みんなの意見を入れていくかということがとても重要になります。

みんなが意見を言えるような会でない、合意形成しているとは言えないんですよ。これはとても重要なことだと思いますので、柔軟に透明に民主的にやっていきましょう。

[大橋副委員長]

私はワーキンググループのメンバーでもあるので、前回のワーキンググループに参加して、いろいろ話をしたのですが、そのときの話を改めて記憶を呼び起こしてみると、やはり3つ、私自身にとってポイントとしてあったかなと思っていました。

まず1つは企業を巻き込むというところで、企業の相談を受けていますという看板がサポセンにもなかったし、そういう看板を掲げているところは仙台市にはなかったというような話があったので、大事な気づきだったのかなとある意味では思っています。

ただ、一方で企業相談の看板を掲げたとしても、ちゃんと相談できる人がいるかという、この事業で言えば、ハードとソフトの、当然ソフトのほうが大事なウェイトを占めるだろ

うと思っていますので、2つ目のポイントとして、サポセンの中の人材の採用や育成のあり方というところを、やはり具体的に考えていくところが機能強化というところでは欠かせないだろう改めて感じておりました。

3つ目は強化と言ったときに、いろいろこういうことをやったほうがいいのか、ああいうこともやったほうがいいのか、プラスの要素がたくさん出てくるんですが、一方で全体のリソースというか、使えるものはそんなに変わらないわけなので、どこを削るのかとか、そういった削減をして効率化していくという観点も合わせた上で、今後の検討を具体化して、強化と削減という効率化の観点が重要ではないかと思っています。

[風見委員長]

ありがとうございました。これから事業者を選定したり、さらに市民の方に入っていたいで、ひとつの形をつくるというのは、とても大きな責任があります。我々はこのスタートをさせるための委員会にいますので、ぜひ言い尽くしていただきたいなと思います。

大体そういう議論がちゃんとしていないところは、企業でもどこでも大体うまくいかなくなります。やはりいろいろな思いでいいと思うので、ベクトルが一致する必要は全くなくて、いろいろな意見があって、それをいい方向に導いていく、そういう意味で合意形成はとても大変ですけど、やっていくべきことです。それによって十分議論されたものはやはりいい結果を生んでいくし、みんながそれに対して、愛着を持ってくれると思うので、それはここに座っている以上は皆さんの責任というふうに感じていただければと思います。

そういう意味でとてもいい意見が出たのではないのでしょうか。いよいよ進むことになるわけなので、責任が重いです。しっかりと後世に残るものをつくらなくてはいけないので、これから未来につながるものがここで折り返してつくられたんだと思えるような透明で民主的で科学的なものを、しっかり応援したいと思っていますので、よろしくお願ひしたいと思っています。

(2) 協働の手引き・事例集について

[風見委員長]

それでは今の議題は終わりました、次の協働の手引き・事例集について、事務局から説明をお願いします。

[事務局（市民協働推進課長）]

資料3でございます。前回の12月の委員会の後、アクションチームということで、佐々木委員と浜委員にもご協力いただきながら検討を進めてまいったところでございます、まだ途中経過ですが、報告と方向性をまとめさせていただいております。

第1回のアクションチームの状況を、参考資料としておつけしておりますが、先週の金曜日も第2回目のミーティングしております、その辺も含めて、お二方には後ほどお話

をいただければと思っております。

それでは資料 3 ですが、若干前回の委員会の振り返りの部分もごさいますが、ご説明したいと思ひます。平成 17 年に作成しました「仙台協働本（せんだいこらぼん）」という手引きがごさいますが、これは市職員向けに、主にいわゆるテーマ型の NPO との協働の推進を目的にまとめたものです。

その後 10 年以上経ちまして、また震災におきましては、地域活動の要の町内会や市民活動団体、大学等の教育機関、中小企業の方、そういった方たちの力が復興にあたっての大きな力となったということで、そういった多様な主体の活躍が顕在化したというところがございます。

その多様な主体の動きといったものを踏まえますと、今の「こらぼん」ですと、企業の関わりの方が弱かったりしますし、また、コミュニティビジネス、コレクティブインパクト、ソーシャルインパクトといったような視点も持ちながら、さまざまな活動事例や連携事例といったものを多数紹介する中で、どうしたらそういった活動が円滑に進むのかとか、より大きな成果が生まれるのか、協働が進んでいくのかというような協働のまちづくりのヒントなども示しながら、市民の皆さんが実践的に活用できる、わかりやすい手引き・事例集にしていきたいと思っております。

具体的な方向性でござひます。手引きと事例集は、別々ではなくて、一体的につくりたいと思っております、どちらかと言うと事例を中心にまとめていきたいと考えてござひます。

そして冊子版のほかにも映像版もつくりたいと思っております。やはり人々の思いや感動といったものは、映像でしか伝わらないものもあるかと思ひますので、冊子版から好事例をピックアップするなどして、再編した映像版も作成したいと思っております。

作成にあたりましては、取材や執筆といった部分も市民の皆さんにご協力いただきたいと思っております、事例に登場するのも市民、作成するのも市民というような形が取れたらと思っております。

成果品につきましては SNS での発信や、その事例をパネル化した企画展のようなものも催しながら、広く普及させてまいりたいと思っております。

委員会やアクションチームでは、協働の姿を 1,000 人の市民の皆さんのさまざまな取り組みを通して、紹介していくとか、そういった取り組みに対するコメントやアドバイスなども盛り込んでいくことで、手引きにもなるというアイデアが出ました。

取材にあたりましては、例えばサポセンで「市民ライター講座」というものがある、数十名受講生もおりますので、そういった方たちのご協力をいただくというようなアイデアやご意見も出されたところでござひます。

そういった手引き・事例集と合わせまして、やはり市職員向けに現在の「こらぼん」をベースとした手引きもつくりたいと考えてござひます。その「こらぼん」は、理論的なものとして確立された部分もごさいますが、よりわかりやすく、職員も親しみやすいものと

して、先ほど申し上げた市民向けの手引き・事例集と連動させる形で作成したいと考えております。

作成にあたりましては、市民の活動の実践者の方ですとか、専門家等々のアドバイスもいただきながら、また、庁内の職員も幅広く参加しながら進めてまいりたいと考えてございます。

今後のスケジュールでございますが、3月までには大体の骨子のようなものを取りまとめ、改めて次回の委員会にご報告させていただいた後に、取材や製作を開始しまして、秋ごろには完成させたいと考えてございます。説明は以上です。

[風見委員長]

ありがとうございます。これについても先ほどお話しした条例の位置づけの中で、とても重要で、「こらぼん」というのがありましたけど、これまでの伝統的なものは伝統的なもので尊重しつつ、全く新しいものをやるということで、この方針でいきたいというふうに思いますし、これは皆さんの合意で進んできていると思います。

先ほどあった、自立・連携・創発や企業との連携も含めて、この中にやはり埋め込んでいかななくてはいけないことはたくさんあると思います。よくある方式ですが、人に焦点をあてるというのが、実は人間が一番シンパシーを感じやすいんですよ。

映像というのはそういう物語性ですよ。フラスコイノベーションスクールの冊子は、それぞれ個人が震災復興から立ち上がった新しい社会起業家の群像というか、そういうものをアルバムのようにしたものです。それはデザインがとてもうまくできたのですが、個人に脚光を浴びさせるというのはとてもいいと思います。

仙台をつくってきた協働まちづくりの1,000人なのか、あるいは50人なのか、そういうようなことをできたら面白いなと思いながら考えてみていました。これについて意見があればいただきたいと思います。

[佐々木委員]

私のほうからこの検討に中心的に関わったということで、少し補足をさせていただきます。まず最初に、なぜ人なのかということなんですが、例えば協働の手引きをつくるというときに、協働の定義は何だとか、やはりそういう議論になってしまいます。

ただ、そういうのは仙台市の実際にやっている人たちに、自分が考える協働というのはどういうことなんだということを聞くほうが早いのではないかという議論が前提にありました。多分ここにいる委員の方も協働と言ったら、全く同じことを言わないと思います。

やはりこの15年間の仙台の市民活動育成の蓄積として、それぞれの協働論があると思いますので、より多くの顔が見える形で、その人の協働の定義というものを述べてもらうと、そして仙台市は多様性のある市民活動、協働をこの間推進してきたんだということを自負するようなことを、まず冊子で明らかにしたらいいのではないかという話が前提にあって、

この話が出てきています。周回遅れになってきているという議論もありますけれども、もしかしたらこれまでのものをきちんとまとめれば、やはりまだトップランナーとして自負していいのではないかということです。

そしてもうひとつ重要な議論として、スタッフの支援のノウハウの話が出ているわけですが、現状では15年前の冊子があるものの、テキストが無い中で、スタッフはどこかに研修に行って来て、ノウハウを学んできて、支援しなさいとなっているのですが、15年前の本では、ちょっと古いと思いますので、新しい形のテキストもつくって、サポセンのスタッフも一緒に作成に関わりながら、仕事を通してスタッフの機能強化と言いますか、スキルアップにもつなげていけば、先ほどからのハードのまちづくりにソフトをうまく絡ませられると思います。

こういう目に見えないソフトの力もうまく関連させていくということを、強く念頭に置いて、そしてより実践の手引きになるように議論を重ねてまいりました。

[風見委員長]

浜委員も一言お願いします。

[浜委員]

その事例集の1,000人の1,000というのは仙台の仙なんですね。例えば政宗公生誕450周年だから450とか、話題性をまずつくりたいと思いました。

そういうところから入っても面白いのではないかと、あとは例えばすぐく一生懸命地域の活動をやっているおじいちゃんに光があたりとお孫さんが喜んでくれたりとか、どんどん巻き込んでいけますし、基本的にその市民ライターの方が書いたり、写真を撮ったりして、その方のお名前も載ることで、この冊子をみんなで作ったんだという市民力みたいなものがどんどん高くなっていくと思うので、できるだけ多く巻き込んでいくのがいいのではないかと思います、仙台の仙とかいろいろかけてみました。

[風見委員長]

いいですね、1,000人。今の方法だったらできそうな気がしますけどね。市民ライターも含めて、仙台市の人材の奥深さというか、幅の広さというか、そういうものが出ると思います。

やはり参加できる機会があれば、それに対して愛着を持って、おばあちゃんが出ているとか、自分ももしかしたら絵を描けるかもしれないみたいな、そういうようなものでやれるといいなと思っています。

[伊勢委員]

今回のこの協働の手引き・事例集ですが、先ほど佐々木委員のほうから、オリジナルの

テキストになればいいなということがあったと思います。すごく素敵だなと個人的には感じています。先ほど風見委員長のほうからもやはり、人に焦点をあてると共感を得られやすいというところは、私も本当にそのとおりだなと感じています。

ではその事例集を、どのようにするのかとなったときに、活動内容のほか、協働のきっかけ、失敗例、アドバイスなどをテンプレート化して掲載するということがあるのですが、例えばこの手引き・事例集が担い手の育成だったり、担い手の裾野を広げる第一歩という意味を持たせるのであれば、やはりその人が読んだときに、「あ、やってみようかな」とか、あと、「これなら自分もやれるかな」というようなところ、参考になることがたくさんあるといいなとは思っています。

その中で、どうやったらそれが参考になるのかなと思ったときに、やはりプロセスを通して、どういうふうに協働が進んでいったか、事例については、やはり実践者だと好事例を聞いて、すぐつながりやすいと私は感じています。

それ以外の人たちにどういうふうに広げられるかと言ったら、それがどういうふうになったら今の活動につながったのかというプロセスを少し見える化することと、そこにその関わった人がどういうふうに考えて変化してきたか、市民活動をやることによって、そのメリットや、ご自分における変化がどういうふうに起きてきたのか、やりがいとか生きがいにつながる何かその過程が少し見える化されるといいなと個人的には思います。

あと最後に、やはり風見委員長がおっしゃっていましたが、やっぱりデザイン性というところでは見た目は重要かと思います。文字の羅列だけではなく、その方に焦点をあてたときに、どのようにわかりやすく見せられるかというのはひとつあるかと思います。

[風見委員長]

ありがとうございます。こういう冊子というものは冊子でいいと思います。あと「こらぼん」も、今まで使われてきたものは大事にするのはいいと思いますけれど、やはり協働まちづくりになったということで、市民というか、企業を含めて、いろいろな公民連携、産官学民が全部つながるようなものにできるというのが一番大事です。そのために皆さん関わっていただく、やはりアンカーをつくるのが一番大事です。

[佐々木委員]

補足するとこの1,000人に取材に行くということではなくて、例えば1事例に協働というのはひとりじゃないわけですから、100人関わっている事例もあると思います。

そういう意味で誤解のないように補足しておく、結果としてここにいる人たちも最後に名前が載ると思いますので、そういう人もカウントして全部で1,000人ということになっています。皆さんのご協力なしにできないと思いますので、これからやってくれる人も増えてくると思いますが、何とか1,000をうまく出せるようなアイデアをまた考えていきたいと思ひますし、皆さんとまたアイデアを出していきたいと思ひます。

[風見委員長]

1,000人というのは別にできるのではないかと思います。

先ほど申し上げたように、どういうふうに関わっていくかということをつくるのと、冊子と映像版というのがあるとやはりいいなと思います。つくるときは大変ですけど、広がったときに効果が倍増するので、ぜひお願いしたいと思います。

あと先ほども事例で、人に焦点をあてるということも含めてお話ししておきたいのは、やはり何が大事かと言うと、理論と実践があって、理論は大事です。でも、協働とは何かという話だけしても、人は見ないですね。それはいろいろ本も出て、教科書もあって、今何人かの委員から出たように、これに正解はないんです。要するに実証していく概念という意味では事例が大きいです。

そして事例の中で指し示す、ひとつの方向性が今の一番新しい協働のあり方だというふうに言えると思うので、それぞれ関わった人がインタビューで最後に「あなたにとって協働とは何ですか」というようなことを並べたときに、それが500とか1,000になると、すごい迫力になる、そういう意味で、ひとつのソーシャルリサーチの方法なんですよ。

その中で概念は書くけれども、誰かがまとめたことを聞きたいのではなくて、実際の人たちがどう考えているかというのを並べたら、読みたくなりますよね。そういう意味でそれを成し遂げることができれば、これは成功かなと思います。

理論と実践というのは、両方行き来しないと絶対にいいものがないので、これから力を入れるところだと思います。いいものをぜひつくっていただきたいと思います。

いろいろな市民がそれぞれどういう思いで協働をしているのかというのは、それはある意味正解であって、それつなげたときに体系化するのはまたそういう時期が来ると思うので、現時点では仙台市がトップランナーで走って来たその成果に光をあてて、それを体系化するという流れでいいのではないのでしょうか。そういう時期が来たというのは、やはりなるほどトップランナーがやるべきことだということになると思うので、とてもいいものになると思います。ほかに何かご意見ありますか。

[小野委員]

内容的にも早く読んでみたい、見てみたいという期待でいっぱいです。しかしながら1,000人分の記事ということは単純に一人1ページとしても、1,000ページになるわけで、それを活用するにあたって、1ページから1,000ページまで全てを読むのはなかなか大変なことです。こういう情報がほしいと言ったときに、すぐ探せるような仕組みや構成、デザインの工夫が必要だと思います。ウェブであれば、キーワードを入れて検索すれば、すぐ情報にたどり着けると思いますが、今回作成する映像にしても、印刷物にしても、そういった検索性がないとなかなか活用が難しいかもしれません。恐らく内容は大変充実したものになると思うので、ぜひ使いやすいものにしていただきたいです。

もう一点懸念されるのは、多くの方が自分の思いをインタビューで語り、それをいろいろ

るなライターの方が記事にするのはよいのですが、それを仙台市の印刷物やホームページとして公表し不特定多数の方がご覧になる以上は、やはりその内容の校閲や校正、著作権や肖像権など権利関係の確認、文章・写真・イラストなどの表現面の確認も重要だと思います。私も仕事で印刷物やウェブサイトの校正や表現チェックをすることがありますが、ひとつでも間違いや不適切表現があると、その企業にとっては大きなマイナスイメージになりかねません。今回はこれだけネタがたくさんあって、充実したものになると思いますので、最終的に仙台市として責任を持って出せるように、ぜひしっかりとしたチェック体制をとっていただければと思います。

[風見委員長]

しっかり現実的なことを言っていたいてありがたいですね。広辞苑のような厚いものを皆さんに持たせる時代ではないと思いますけれど、そのあたりは何かアイデアはありますか。

[佐々木委員]

手引きと事例集を一体的につくるということは、やっぱりひとつの肝です。例えば協働にはどんなタイプのものがありますかというときに、こういう 5 タイプがあるとして、この 5 タイプは事例集のこの何ページを見てくださいというように、つなぎ合わせていくということは、議論の中でありました。

そして確かに誰がチェックするのかということもすごく議論になりました。アイデアとしては、ウェブページだと直せますので、まず 1 回ウェブページにアップをしていって、ただし、あんまり固い行政用語でがちがち書いても、そもそも伝わらないという恐れもありますので、その辺はトライアルをしながら、最終的な冊子の印刷につなげていくというようなことで、まずは 1 段階としてはウェブに上げて、状況などを見ていくというふうなことをしていきたいと思います。その辺りは議論はしていましたので、またさらに実際のノウハウについて皆さんの意見をいただきながら、アクションチームをまたやっていきたいと思います。

[風見委員長]

浜委員は何かありますか。

[浜委員]

最初、映像も 1,000 と思ったのですが、どうやっても映像を 1,000 というのはちょっと厳しいので、冊子が 1,000 で、その事例をピックアップして、映像化していくような形なら可能ではないかと思っています。

[風見委員長]

それはもうこれからつくるわけですから、現実的になっていただいていいと思います。1,000 というのはたくさんという意味もあると思うんですね。仙台の仙もありますけれど、そういう意味では今までの仙台の協働まちづくり、市民協働の歴史的なデータベースの上に成り立ったものという意味でいいのではないのでしょうか。

そこから例えば、検索性のあるネットに載せれば、パッと見れるようになるというのはとてもいいので、そのデータベースとしての機能もついたりしていくのかなと思いました。そのあたりのデザインや制度設計、企画を練り上げていくという現実的なところがあると思います。

ただ、本当にそれぞれ頑張ってきて、今まで日常のようにやっているけれど、そこに素晴らしい行いをしている人たちがいて、そこに焦点をあてるということが、スポットにはなるのではないのでしょうか。

[佐々木委員]

プロセスの中で若干補足すると、最初に事例の掘り出しをきちんとやらなくてはいけないというのがありまして、仙台市中心部にある、ある意味感度の高い NPO も大事ですけれども、例えば秋保の田植え踊りであるとか、お薬師さんの手作り市であるとか、場合によっては行政の支援、あるいはどこかがサポートしなくても、きちんと成り立っている事例も含めて、そういうものをやっぱり一回拾い上げるという作業がとにかく大事で、その部分をどうやるかということにかかってくるのかなと思います。

[風見委員長]

その内容については今日の方針を受け取っていただいて、またアクションチームのほうでさらに具体的に進めていただければと思いますので、今日は方向性、ビジョンみたいなものを共有できたと思いますが、具体論で設計するとやはりまた一工夫いると思いますね。

ただ、ぜひ今日の皆さんでシェアした方向性を持ち帰っていただいて、大変忙しい中の作業になっていくと思いますけれど、具体的な作業プランを進めていただければと思います。

[大橋副委員長]

たしか前回の委員会で、この協働の手引きに関して発言した記憶があるのですが、市民向けだけではなくて、行政職員向けのほうも充実させてほしいという意見を言った記憶がありまして、今回その部分が反映されて、両方書かれているのがすごくよかったと思いました。

あと今日 1,000 人ということも結構話題になっていますけれども、自分もその一人になるんだろうなと思いつつ聞いていました。その話題性がすごくいいなと思う一方で、やっ

ぱりその 1,000 という数字に引っ張られすぎて、そもそもその 1,000 人集めるために、協働って何だろうというところがぼやっとしてしまうのであれば、本末転倒だと思うので、そうならないようになるといいなというのと、具体的なアイデアとして、例えばピックアップする事例としては、例えば 50 ぐらいかもしれないけれど、そこに関わった人はたくさんいて、それを合計すると 1,000 人ぐらいになるようなつくり方というのもひとつあるかなと思って聞いていました。

あと最後に、協働の手引きの市職員向けのほうで、作成する人が市職員を中心とした改訂と書いていますが、私も今回 NPO 留学の受け入れ団体として、この間研修会も参加させていただきましたが、あの場に参加した行政職員みたいな方々がたくさんいたら、仙台市はさらによくなるなと思うぐらい、前向きな職員の方々がたくさんいらっしやったと、改めて思っていて、あのような方々にこの手引きの作成に関わってもらおうとすごくいいなと思いました。

[風見委員長]

そういういろいろな経験を積んで、行政マンというのも、とてもイノベティブな、チャレンジな仕事になってきていると思います。

今度 4 月から宮城大学でつくる地域創生学類には公務員の養成もあります。いろいろな先端の公務員の人からお話を聞いていると、公務員は安定した仕事というイメージから、チャレンジな仕事になるということを皆さん言っていました。クリエイティブな公務員を仙台市も必要としているはずです。

そういう意味では、そういうものをつくっていくための教育がどう成り立っているかということがあるので、場面をつくったりとか、舞台をつくったり、そういうタスクを与えないとどんどん育っていかないので、協働というのは行政の中をちゃんとするのが、ずっと言われている課題でもあり、「こらぼん」はそういう意味もあったわけです。

その部分もさらに加速していただきたいというふうに思います。それでは局長から今までのところの議事で何か最後に意見をいただければと思います。

[事務局（市民局長）]

サポセンの機能強化、新しい手引き・事例集のお話など、アクションチームの皆さんには本当にお忙しい中、綿密なご検討をいただきまして、大変感謝申し上げているところでございます。

我々も何とか財政当局に理解をいただきまして、それぞれ必要な予算案を計上できたところでございます。明日から第 1 回の定例会が開会になりまして、新年度の予算でありますとか、市長の施政方針などを中心に、1 カ月間、議論がなされますが、当然、このサポセンの話や市民協働の話題にもいろいろな質疑があるのではと思っているところでございます。

それぞれ先ほどのいろいろな意見を吸収できるような環境をつくって、合意形成の下にサポセンは市民活動の支援機能から、協働の推進の拠点も加えてさらにふさわしいセンターづくりをして、これまでご利用いただいている方はもとより、いろいろな団体が出入りしやすく、出会いにつながる交流の機会をまず増やさなくてはいけないというお話をいただきました。そしてうまくマッチングができて、協働につながっていくような場をつくっていきたいと思っておりますし、1,000人の顔が見えるような事例集は、今までの役所の手引きや、事例集の中でもちょっと面白いというか、親しみやすいものになるのかなと期待をしているところでございます。なかなか大変な作業にはなろうかと思っておりますけれども、実践者の方はもとより、未経験の方にも手に取って親しんでいただいて、こういうことなら自分もやれるかもしれないとか、失敗事例というのもありましたけれど、ここでこういう失敗をしたおかげで今、またこんな別な発展につながったというのも、非常にいい例になるのかなと思っております。それがすごい分量になりますから、一番必要な情報だけ取りたいという、そのスピードの時代でもありますので、そちらの要請にこたえる工夫もいるという議論も聞いていて、非常に役に立ちました。なかなか大変な作業になるとは思いますが、ぜひ新年度にみんなで作っていけるように持っていければと思っております。今後ともご苦勞をおかけするとは思いますが、我々も指定管理者のほうとも一緒になってやっていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。今日はありがとうございました。

[風見委員長]

引き続きアクションチームのほうについては、サポセンの機能強化についても、この手引きについても、さらにまた拍車をかけていただかなくてはならないと思っておりますので、我々ももう一知恵、二知恵出して、何とか来年度、形になるように頑張っていきたいと思っております。議事のほうは以上で終わりたいと思っております。

4 その他

[風見委員長]

それでは、その他で何かありますでしょうか。なければ事務局のほうからお願いします。

[事務局（市民協働推進課長）]

NPO 留学ということで、資料をお配りしております。協働推進人材育成事業ということで、手引きといったもので学ぶということもございしますが、やはり実体験に勝るものはないということもあって、昨年度から実施しているところです。

昨年度は6名でしたが、今年度は20名に拡大して、実施したところでございまして、先般その報告会があり、参加職員からは、市民活動の特性が理解できたとか、顔の見える関係を築くことができたといったお話がございました。今回は20名の職員でしたが、こうい

った体験や学びの成果を全庁に広げていってほしいと期待もしているところでございますし、先ほどありましたが、こういった手引き等の作成にも関わってもらいたいと思っております。

[風見委員長]

今の点で何かご質問ありますか。

[伊勢委員]

対象 20 名（公募）とありますが、今回応募をしてきた職員は、実際何名で、選抜されて 20 名なのかとか、抽選なのか、それとも 20 名ぎりぎりだったのか、公募だけれど上司から行って来なさいと送り出されたのか、そのあたりはいかがでしょうか。

[事務局（市民協働推進課長）]

両方ありまして、ぜひやりたいという職員もいれば、所属から特に若い職員のいい経験になるので、ぜひこれは行くべきだということで、若手のホープが参加したパターンもありまして、ちょうど 20 名と予定の数になったところでございました。

[伊勢委員]

今後希望者が増えた場合というのは想定されていますか。

[事務局（市民協働推進課長）]

受け入れ団体側のこともありますので、29 年度も 20 名ぐらいを目途にやっていきたいと思っております。

[風見委員長]

やはり両方いるんですね。これはどんどん増えていくといいですね。または行きたいところをみんなで提案して開拓していくのも重要だと思います。次の事項をお願いします。

[事務局（市民協働推進課長）]

今年度の委員会はこれで最後になるかと思いますが、委員の任期は 2 年間ということで、来年度もよろしく願いいたします。次回は 4 月から 5 月ぐらいの開催を予定しておりますので、また改めて日程調整をさせていただければと思います。以上です。

[風見委員長]

本年度最後ですが、皆さんでこの議論してきたこのプランやビジョンを来年ぜひ実現できるように、頑張っていきたいと思っております。年度最後ですので、皆さんの健闘を称えて、

来年度の健闘も約束しながら、拍手で終わりたいと思います。お疲れ様でした。

5 閉会

[事務局（協働推進係長）]

ありがとうございました。それでは以上を持ちまして、第5回の仙台市協働まちづくり推進委員会を終わらせていただきたいと思います。本日も遅くまでご審議いただきまして、ありがとうございました。—了—

〈議事録署名人〉

[委員長] 風見正三

[署名人] 島田福男